

「労働時間」と「ゆとり」の間

東京大学大学院教育学研究科教授 矢野眞和

30歳前後の世代と話していて驚くのは、彼らの働き振りである。夜遅くまで働くのが常態になっている。大都市サラリーマンの一部の話ではない。全国を対象として生活時間調査によっても、労働時間が最も長いのはこの若い世代である。仕事に熱心なのは結構なことだとは言い切れない。むしろ根の深い社会問題だと私は思う。

働きすぎには2つのタイプがある。一つは、「期待と確実性」を契機とした意図的な働きすぎであり、いま一つは、「不安と不確実性」に脅かされた意図せざる働きすぎである。

長い時間働けば確実に何かが期待できる。自分が望む豊かさを手にすることもできる。このような思いをこめた意図的な長時間労働が、90年までの働き方の主流だった。この日本人の働きすぎが国際的な社会問題になり、1800労働時間社会と週休二日制の実現が社会政策の中心課題として登場した。この政策は、年間労働時間の短縮が生活の質の向上とゆとりをもたらすという素朴な因果的発想に支えられていた。

しかしながら、年間労働時間の長短と生活のゆとりとの間に、それほどシンプルな因果関係が成立しているわけではない。生活時間調査を蓄積してきた私の分析経験によると、生活のゆとりは年間労働時間の短縮や週休二日制によっ

て達成されるものではなさそうである。年・月・週といった時間単位よりも、日々の日常生活（平日）が大事だと判断されるからである。週休二日制であるかどうかよりも、平日に、友人と交際をしたり、地域社会の仲間とすごしたり、保育園の送り迎えに支障のない時間をもてたりする機会の存在が大切である。「平日に、日常的なストレスを抱え込まずに、夫婦がともに働ける時間のゆとり」を生活設計の標準型にする必要性が出てきている。

ところが、現実はこの標準型から遠く離れている。平日の平均労働時間はこの30年間ほとんど変わっていない。土曜が休みになって、平日はかえって忙しくなったりしている。平日の長時間労働が許容されるのは、男性が家事をしないことを前提にした男性主義モデルである（家事をサボる口実のために残業している者もいる）。そればかりではない。誰と一緒に行動しているかを調べると、「孤独な時間」と「家族と一緒にいる時間」が増え、社会的交際の時間は減少している。狭い人間関係だけに閉じ込められた寂しい生活に変貌してきた。

90年以降には、「不安と不確実性」による働きすぎが、とくに若い世代で増えているように思う。失業率が高いのは若い世代である。彼・彼女らの働き振りを聴くにつ



け、結婚する難しさを納得してしまう。亭主関白を標榜したくても、専業主婦を希望しても、それをかなえる家計はもはや成り立たない。独身時代の生活水準を維持するためには共働きが必要だが、その家庭生活を想像するだけで憂鬱になる。

中国の友人に「一家二制」という新しい言葉があると教えられた。夫婦共働きが普通の中国だが、二人のうちの一方が、給料は少なくとも安定した職に就いて、他方が不安定ながらもベンチャー的な仕事に就いて挑戦する、という夫婦の新しい働き方を表現した言葉だという。面白い発想だと思った。

長期に安心した生活を確保するためには、一人ではなく、夫婦二人で協力して、不安の少ない確実な生活拠点を設計しなければならない時代になっている。労働時間とゆとりの間に、「平日」と「家族」という変数を組み込んで、新しい生活設計の枠組みを構築しないと「不安と不確実」な社会を生きる道筋は見えてこない。